

## 1 「地域子ども教室」事業における「学び」、子どもの居場所としての意味

「地域子ども教室推進事業」は、少子化が進む一方で、青少年の問題行動の深刻化や、地域や家庭の教育力の低下等の緊急的課題に対応し、未来の日本を創る心豊かでたくましい子どもを、社会全体ではぐくむために実施している事業である。

昨年度は、区内17拠点において、様々な活動内容で実施したが、それぞれ成果を上げてきたと評価している。(別紙資料「未来を育む」参照)

## 2 児童館・放課後児童健全育成事業について

平成16年度から地域の実行委員会が推進してきた「地域子ども教室推進事業」と児童館・学童クラブ事業は、利用者の立場に立って、教育や福祉という枠組みを越えて事業を構築していく時期にきていると考える。子どもの育成をどのように考えていくか、子どもをどのように伸ばしていくのかという共通の視点に立って、いずれかの事業に吸収合併するという発想ではなく、両者を一体化した新しい事業像をつくり、その実現に向けて、現実の物的・人的資源をいかに効果的に活用していくのかを考えていく必要がある。

## 3 区民との協働やNPOにおける専門性について

従来、放課後の時間については、家庭や地域の人々が担ってきた経緯があるので、いわば「母親のプロ」としての専門性に負う部分が大きかった。

今後、放課後事業を推進していく上で、子どもの発達段階や児童理解に関する基礎知識、また、それらをふまえたプログラム作りについて、すぎなみ地域大学や学校との連携を図っていく必要があると考えている。

## 4 「放課後子どもプラン」について

これまで実施してきた「地域子ども教室推進事業」については、成果が上がっている事業であると評価しており、今後も何らかの形で継続させたいと考えている。

また、その受け皿として、「放課後子どもプラン」が考えられるが、同プランについては、現在、事業の実施方法等について、東京都が各区市町村に調査を行っている段階である。その調査結果をふまえて、来年度以降、実施していく運びとなるであろうが、教育委員会としても、関心をもってその動向を注視している。

## 資料27-3

## 未来を育む

【第16回】

安心・安全な居場所を作りたい!

遊びを通して子どもの成長を支援する試み

～その1～

次世代を担う子どもたちのために

五木田 勉 = 取材・文



東京都の杉並区立第一小学校では、2004年の9月、放課後の子どもたちの居場所として「すぎっ子くらぶ」がスタートしました。運営にあっているのは地域のボランティアで、学校と協力しながら、子どもたちが安全に遊べる場を提供しています。活動の概要と、成果についてお伝えします。

### 「ただいま!」と言える、学校内の居場所

はじめて「すぎっ子くらぶ」の活動を見せていただいた時、これが今時の子どもたちかと目を疑いました。鬼ごっこ、陣取り、すもう、砂遊びなど、放課後の校庭は、子どもたちであふれかえっていました。学年の枠をこえた仲間たちと一緒に大声を上げ、思い切り身体を動かす。時間を忘れて、自分のやりたいことに熱中する。そのイキイキとした姿を見ていると、「最近の子どもたちは、外で遊ばなくなった」という言葉がいかにも表面的な見方なのか、思い知らされます。子どもたちは、こうして外で思い切り遊びたいという欲望をもっている。問題は、安心して、思い切り遊べる場所がないことなのです。変わったのは子どもたちではなく、子どもたちをとりまく環境だという事実を、目の前につきつけ



校庭で仲間と一緒に。砂に混じっているキラキラした石を見つけ歓声を上げていました。

られた気がしました。

「放課後、子どもたちが安全で安心して遊べる場所。子どもたちの居場所を確保したいという思いからこの活動を始めました。居場所というと、学校から帰ってきて家にも保護者がいないお子さんのための支援というイメージがありますが、そうでない子にも、自由に遊ぶことができ『心の居場所』になるような場を提供したいと。また、せっかくなら、子どもたちが工夫しながら楽しんでいた、昔ながらの『路地裏遊び』を復活させたいと思いました」

こう話すのは「すぎっ子くらぶ」を運営するスタッフの代表、伴野博美さんです。その「路地裏遊びを復活させたい」との思いは「すぎっ子くらぶ」という名前にも込められています。あえて「くらぶ」とひらがなを使うことで、伝統や温かみを感じてほしいと考えたのです。さらに「すぎっ子」には「杉」のようにすくすくと成長してほしい、そして自分の住む地域(杉並区)に誇りを持ち、自分の学校(杉並第一小学校)に愛着をもってほしいという気持ちが込められています。

すぎっ子くらぶには、杉並第一小学校の児童97名(全校児童は267名)が登録。毎日50人前後の子どもたちが顔を出します。子どもたちは、授業が終わると活動場所の一つである視聴覚室に、「ただいま!」と元気なあいさつとともにやってきます。スタッフも「お

かえりなさい」と笑顔でむかえます。

「スタッフが、おかえりなさいと声をかけるようになったのは『ここはふだん使う教室ではなくて、あなた達の部屋なんだよ』という思いを伝えたかったから。最初は『なんか、へんだよ!』という子もいましたが、今ではみんな大きな声であいさつしてくれます」（伴野さん）

何気ないコミュニケーションを通して、子どもたちは、自分たちが大切にされていることを実感しているのでしょうか。すぎっ子クラブのスタッフは、一人一人の子どもにはその子の名前呼びかけますが、子どもたち全体のことを話す時には「すぎっ子さん」という言葉を使っています。その、なんともいえない優しい響きからは、スタッフの子どもたちに対する思いが、そして、同じ目線で接するのだという姿勢が伝わってくるように感じました。

### ●●●「地域子ども教室推進事業」とは？

すぎっ子クラブの活動は、文部科学省の「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業」を受託している「子どもの居場所づくり 杉並実行委員会」の承認を受けて、杉並区内で最初に始まりました。

「地域子ども教室推進事業」のねらいは、放課後や週末に、安心・安全な居場所を子どもたちに提供することです。そのために、学校の校庭や教室などを子どもたちの居場所として解放。遊び、スポーツ、文化活動などの様々な体験活動を実施します。対象は小学生と中学生で、活動に参加するかどうかは、子どもたちの自由意志に任されています。

この活動を支えるのは地域のボランティアで、各地域の独自性を活かしながら、それぞれが活動内容を考え、自主的に活動することが期待されています。

「現在、杉並区内では22カ所の子ども教室が運営され、それぞれの場所で地域の特徴を活かしながら居場所づくりをして下さってい

ます。その中でも『すぎっ子クラブ』はモデルケース的な存在なんです。というのも、地域に住むいろいろな大人が子どもを守り、育てていくという理想が現実の形になっているからです。たぐさんの大人に見守られながら、育てていくことができる子どもたちはほんとうに幸せだと思います」

こう話してくれたのは「子どもの居場所づくり 杉並実行委員会」の子どもの居場所づくりコーディネーター生重さんです。また、すぎっ子クラブの活動について杉並区教育委員会の齋藤さんは、

「区内の『地域子ども教室』の中でも、毎日活動している場所はごくわずかです。『すぎっ子クラブ』はその一つであると同時に、子どもたちの登録数、参加数とも、ずば抜けて多いんです。理由は、ボランティアスタッフの方々と子どもたちの間に距離感がないからだと思っています。あくまでもボランティアなのに、毎日献身的に子どもたちのために活動して下さっているスタッフの皆さんには、頭が上がりません」

### ●●●子どもは、今も昔も変わらない！

すぎっ子クラブでは、昔ながらの「路地裏遊び」を復活させたいとの考えから、子どもたちが喜ぶゲームやおもちゃ類は一切置きませんでした。また、スタッフも遊び方を教えずに、子どもたちの思い通りに遊ばせることにしました。



新聞広告を丸めて、剣にして遊ぶ。

「正直なところ『今の子は遊びを知らないし、大丈夫かな?』という気持ちがありました。ところが開始後1カ月もしないうちに鬼ごっこや土団子作りをしたり、新聞広告を使って紙飛行機や剣を作って遊ぶようになりました。おもちゃやゲームがなくても、自ら工夫しながら遊びを発明する。子どもたちは今も昔も変わらないんですね。大発見でした」(伴野さん)

伴野さんは、こうしてお互いに遊ぶ経験から、子どもたちが自然に協調性を身につけているのではと話してくれました。自宅では、まるで王様や女王様のように大切にされている子どもたちも、すぎっ子くらぶでは、がまんせざるを得ない場面に直面するからです。「たとえば、雨の日のためにトランプやすごろくを用意してありますが、そんなに数はありません。おとなしく自分の順番が来るのを待ったり、仲間のために早めにゲームをやめるといったことを、『すぎっ子さん』は自然に学んでいるようです」(伴野さん)

「すぎっ子くらぶでは、おやつを出していますが、Aさんがおやつの時間にすごく落ち込んでいることがありました。その様子に気づいたBさんが『どうしたの?』と声をかけると、『お菓子を食べられなかったの…』とAさん。するとBさんは、自分の分を『あげる』と差し出しました。Bさんはまだ1年生。でも、むしろ大人が手本にしなければいけないような優しさが育っているんですね」(スタッフの一人、池田さん)

そうはいっても、すぎっ子くらぶには50人前後が参加するため、当然のことながらケンカも起こります。そんな時、スタッフたちは「転ばぬ先の杖を出さないこと」を心がけています。その背景にあるのは「ケンカの解決の仕方を学ぶのも大切なこと」という考え方です。

「もちろん、相手にけがをさせたり、あまりにもひどい言葉で傷つけるような恐れがある時は、止めるようにします。でも、どこで止めるかはほんとうに難しい。毎日、試行錯

誤を続けながら勉強しているという感じですよ。終了時に行われるスタッフどうしのミーティングでも、私たちの対応に問題がなかったかを話し合うことがありますね」(池田さん)

その結果、場合によっては、担任の先生にフォローしてもらうなどの対応をとることもあるといいます。スタッフと学校の先生方をつなぐパイプ役を果たしているのは、リーダーの伴野さんです。時には、逆に担任の先生からも、その日クラスであった出来事についての情報提供があるそうです。このように、お互いの立場の違いを乗り越え、子どものためにできる限りのことをするという協力体制があることが、すぎっ子くらぶの成功の要因の一つではないかと感じました。

「昨年末には、広島や栃木で痛ましい事件が続き、学校としても子どもたちの安全をどう守るか、再度、真剣に見直さなければいけません。しかし、一連の事件が起こる以前の平成16年の冬には、スタッフの皆さんの発案で『すぎっ子さん』のうち、帰宅時間が5時前後になっている子のお迎えを、冬の間は出来る限りしていただくよう、保護者の方々にお願いを出していただいています。さらに、どうしても都合がつかない場合には、ご近所に住んでいる保護者の方に一緒に送っていただくようお願いするといった、きめ細かい対応までして下さいました。子どもの安全な居場所の確保のために、最大限の努力をして下さることに、心から感謝しています」(杉並第一小学校長 高田英雄先生)

### ●●●「子どものため」を考え、厳しく叱る●●●

すぎっ子くらぶが目指しているのは、子どもたちが自由に、自主的に過ごせる場所を提供することです。しかし、そのためにこそ守らなければいけないルールを明確にして、それを子どもたちに守らせるように徹底しています(表1を参照)。その中でも「すぎっ子くらぶに来ている人は、みんな仲間です。仲良くしましょう!」というルールを守るよう、

特に強調していると伴野さんは話してくれました。

「たとえば仲間をいじめるような子を見つけたら、その場で、厳しく叱るようにしています。『すぎっ子くらぶは仲間を作る場所。すぎっ子くらぶに来ているのは、みんな仲間なの。ほかのことは、多少わがママを言っても、好きなことをしてもいい。でも、すぎっ子くらぶの仲間を傷つけたり、悲しい思いをさせたりする子は絶対に許しません』。そんな感じで、叱ります。

その子が『ごめんなさい』と謝ったら、今度は『〇〇さんよりも、もっと悪い人たちがいます』とハッキリ言います。『どうしてあなた達は、悪いことをしたすぎっ子さんに、そういうことをしたらダメだよ、と言えないの？ どうして、伴野さんにいいつける前に、自分の口で言えないの？ すぎっ子さんは、みんな仲間でしょう。だったら、悪いことをしている仲間に、ちゃんと注意してあげなさい。それなのに黙っていたんだから、みんなは〇〇さんよりも、もっと悪い』と叱ります」

子どもたちの成長を願い、真剣に叱るからこそ、子どもたちは、仲間と仲良くすることの本当の意味を身体で学ぶのでしょう。実際、すぎっ子くらぶの開始直後に比べると、伴野さんが厳しく叱る回数は激減したそうです。

「こうしたことができるのも『すぎっ子くらぶ』という集団があるからです。社会は二

人から始まるでしょう。ところが『すぎっ子さん』の中には一人っ子が多い。家庭の中に『社会』がないんですね。それに、たとえ兄弟がいたとしても、保護者の方は、ついつい我が子のわがママを聞いてしまうことが多いようです。

ところがすぎっ子くらぶに来れば、お互い五分と五分です。そこに『社会』があるんです。我慢しなければいけないこともあるし、自分の意見が通らないこともある。たとえばお家なら、寝ながらお菓子を食べることもできます。でもここでは、ちゃんと座って食べなければいけない。『すぎっ子さん』には、そういうことを一つ一つ覚えてほしいし、その過程で、自分の居場所を見つけたいと思っています。社会に出たら、楽な道ばかり選ぶわけにはいきません。すぎっ子くらぶの経験が、将来社会に出た時に役立てばいいなと思っています」（伴野さん）

伴野さんは、他のスタッフに「自分は厳しい父親役を演じるから、その後のフォローはよろしくね」と話すことがあるそうです。自由でのびのびした遊びの場を支えているのは、こうした厳しさと優しさなのでしょう。街中で、社会のルールを破っている小学生を見かけても、つい見て見ぬふりをして通り過ぎてしまうふだんの自分の姿を思い出しながら、子どものために、大人はあえて厳しい姿勢を取ることが必要だと改めて自覚させられました。（次回に続く）

表1：すぎっ子くらぶのルール

- 必ずあいさつをしましょう
  - 「連絡ノート」は、来た時に、決められた場所に出しましょう
  - おうちに帰ったら必ず、おうちの人に「連絡ノート」を見せましょう
  - 具合が悪くなったら、我慢しないで、スタッフの人に言いましょう
  - 決められた場所と、時間は必ず守りましょう（勝手に外に出てはいけません）
- ☆すぎっ子くらぶに来ている人は、みんな仲間です。仲良くしましょう！



右側が伴野さん。家に帰る子どもたちの目を見つめながら、優しく言葉をかけていました。

# 未来を育む

次世代を担う子どもたちのために

## 【第17回】

安心・安全な居場所を作りたい！

遊びを通して子どもの成長を支援する試み

～その2～

五木田 勉 = 取材・文



先月号に引き続き、東京都の杉並区立杉並第一小学校で行われている「すぎっ子くらぶ」の活動を紹介します。その成果とは何か？ 様々な困難があったにも関わらず、活動を継続できた原動力とは何か？ お伝えしたいと思います。

## 「すぎっ子くらぶ」とは？

「すぎっ子くらぶ」は、文部科学省の「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業」の一環として東京都の杉並区内で最初に始まった取り組みです。

地域子ども教室推進事業のねらいは、放課後や週末に、子どもたちに安心・安全な居場所を提供することです。そのために、学校の校庭や教室などを開放。遊び、スポーツ、文化活動などの様々な体験活動を実施します。対象は小・中学生で、参加は子どもたちの自由意志に任されています。

この活動を支えるのは地域のボランティアで、各地域の独自性を活かしながら、自主的な活動が行われています。

「すぎっ子くらぶ」の特徴は、大人が遊び方を教えたり指導したりするのではなく、子どもたちが自由に遊べる場を提供することに徹していることです。これは、すぎっ子くらぶを運営するスタッフの代表である伴野博美さんの「昔ながらの路地裏遊びを復活させたい」という思いを形にしたものです。

実際に、活動の様子を見せていただくと、校庭で遊んでいる子どもたちは鬼ごっこ、陣取り、すもう、砂遊びなどに夢中になっていました。一方室内では、新聞広告を使って紙飛行機や剣を作って遊んでいました。それは、伴野さんの「今の子どもたちには、おもちゃ

やゲームがなくても遊びを発明する力がある。子どもたちは今も昔も変わらない」という言葉どおりの姿でした。

## ●●● 集団だからこそ、学べること

それでは「すぎっ子くらぶ」の活動は、具体的にどのような成果を出しているのでしょうか？ 先月号では、次の2点をお伝えしました。

### ①協調性を伸ばす

遊ぶ順番を待つ、お菓子をもらえなかった仲間に自分のお菓子をあげるなど、協調性や仲間を思いやる心が育っている。

### ②ルールの徹底

お互いが自由に過ごせるためにも、ルールを明確にして、徹底している。特に大切にしているのが「みんな、仲良くしましょう」というルール。守られていない時には厳しく叱ることで、子どもたちは仲間と仲良くすることを実体験から学んでいる。

こうした成果が出ているのも「すぎっ子くらぶ」が集団であるからです。最近では一人っ子が増えていますし、たとえ兄弟がいても、保護者はつい我が子のわがままを許してしまうことが多いのではないのでしょうか。そのため、子どもたちが我慢したり相手を思いやる機会が減っています。すぎっ子くらぶは、そ

うした機会を補う機能を果たしているのです。

さらに、すぎっ子くらぶには1年生から6年生までが参加しています。こうした「異年齢集団」での経験も、貴重な機会となっているようです。

「このルールの一つに『遊ぶ時に使った物は、必ず元にもどしてから帰る』というものがあります。もし破った時には、次の日は遊べないことにしています。

時々、このルールを破る子がいるんですが、上級生が『遊べなくなったらかわいそう』と、代わりにこっそり片づけていることもあります。逆に、上級生が出しっぱなしにした道具を下級生が片づけることも。そんな姿を見ると、うれしくなってきました」（伴野さん）  
「上級生が下級生に遊び方を教えたり、体力が弱い子もちゃんと一緒に遊べるように気をつかったりしている姿を見かけます。また、中にはスタッフが注意しても言うことを聞いてくれない子もいますが、上級生の言うことはしっかり聞いて、仲間にとって迷惑な行為を止めることもあるんです」（スタッフの一人、池田さん）

### ●●● 潜在的な可能性を開花させる場

ここまで紹介した成果は、子どもたちが仲間との関わりを通して人間関係について学んでいることでした。次に、2つ目の成果として紹介したいのは、子どもたちの潜在的な可能性を引き出す場として、すぎっ子くらぶが機能しているということです。

A君は、すぎっ子くらぶに入った当時、わがままな行動や言動が目立ち、スタッフも「このままでは、くらぶの和が乱されてしまうのではないか？」と心配したほどでした。ところが、A君は仲間との関わりの中で、次第に自分の欲求を抑え、仲間とうまくつきあうことを学んでいきました。

「今では、A君は同じ学年のリーダー的な存在です。たとえばみんなの和を乱すような言

動をする子がいると、『ダメだよ』と注意してくれるまでに成長しました。今後、彼がさらにどんなふうに成長していくか、ほんとうに楽しみです」（伴野さん）

もしも、A君がすぎっ子くらぶに入っていなかったら、わがままな言動のまま、学校のクラスの中で浮いていたかもしれません。それでは、彼がもつリーダーとしての能力は開花しなかったでしょう。学校とは別に、すぎっ子くらぶという心の「居場所」があったことが、彼の能力を引き出すきっかけになったのです。

A君とは別な例として、友だちづきあいが苦手だったB君のケースがあります。B君は友だちが少なく、学校から帰ってくると家の中で一人遊びをしていることが多い子でした。しかしすぎっ子くらぶに入ると、得意の折り紙を仲間の前で披露するうちに、彼を見る周りの目が変わっていきました。

「だんだんB君と遊ぶ仲間の数が増えていきました。さらに、『外で鬼ごっこをして遊ぼうよ』などと声がかかるようになりました。また、昨年10月には、地域の子ども祭りに、B君が中心になって『折り紙屋さん』を出店したんです。訪れたお客様に、折り紙を教える彼のイキイキした姿が印象に残っています」（伴野さん）

### ●●● 多くの大人との関わりがあるからこそ！

3つ目の成果は、子どもたちがさまざまな大人と関わりをもてることです。現在すぎっ子くらぶのボランティアは10名。それぞれ違った個性をもつ大人と接することは、ふだんは保護者や担任の先生などの限られた大人としかふれあうチャンスがない子どもたちにとって、貴重な機会であるに違いありません。

逆に、大人の立場から見ると、複数の目で子どもを見守れることは、大きな意味があるようです。

「けんかがあった時など、反省会でそのことを報告するんですが、けんかをした張本人に

ついて、別のスタッフから『この前、〇〇さんはこんなことを言っていた。優しいところがあるのにね…』などという話が出ることがあります。『そうなんだ!』と、意外な一面に驚くことも多いですね。

それから、スタッフとして継続的にすぎっ子さんたちと関われることも大きいと思います。たとえその子のイヤな一面を見たとしても、後で別ないい面を見ることができる。『ひとつの出来事だけで判断したらダメ』と、少し大きな心で子どもたちと接することができるようになった気がします(池田さん)

その他にも、すぎっ子クラブの活動は思いがけない成果を生んでいます。

「1、2年生は上級生より早く、クラブに顔を出します。でも、すぐに遊び始めてしまうと、上級生に迷惑がかかる。そこで『お兄さんやお姉さんたちの勉強が終わるまで、部屋で静かにしていようね』と説明しています。

すると、スタッフが指導していないのに、自主的に宿題を始める子が現れて、他の子どもそれを真似するようになりました。きっと、宿題を済ませておけば、心おきなく遊べるからなのでしょうね。一方上級生は、先に遊んでから帰りがけに宿題をする子どもが多いんです。もちろん中には『遊びに来ているんだから、宿題はやらない』という子どももいます。どちらにするかは、本人の判断に任せています(伴野さん)

このように宿題を済ませてから家に帰ることは、保護者にも評判がいいようです。その他にも「すぎっ子クラブに参加するようになってから、小言の回数が減った」という感想を話してくれる保護者も多いそうです。

「注意しなくても、子どもたちはすぐに風呂に入ってご飯も食べてくれる。またテレビを見たり、ゲームをしたりする時間も減って、早く寝るようになったそうです。外で思い切り遊ぶから、おなかもすくし身体もほどよく疲れているんでしょうね。『小言が減って、子どもたちとコミュニケーションする時間が増えた』と言って下さる保護者の方も多いん

ですよ」(伴野さん)

： 困難を乗り越える原動力はどこ  
： に？

すぎっ子クラブの立ち上げにあたって、伴野さんはクラブを毎日開くことにこだわりました。

「負担が大きすぎるから回数を減らした方がいい、とアドバイスしてくれる方もいました。でも、こちらが決めたお休みにしか利用できない子だっているかもしれません。全ての子に居場所を提供するためにも、どうしても毎日開くことにしたかったんです」(伴野さん)

それ以外にも、立ち上げ当時は「教育のプロでないスタッフで大丈夫か?」「学童に通っている子どもの取り合いにならないか?」などの不安の声があったそうです。しかし、実際に活動を続けるうちに、そうした声もなくなり、地域をあげて子どもの居場所を作ろうという協力体制が生まれました。

「すぎっ子クラブに参加する子どもたちの数は年々増えています。みんな、すぎっ子クラブを楽しみにしているようです。

子どもたちに安心・安全な居場所を提供して下さっていることはもちろん、すぎっ子クラブは、仲間やボランティアの方とのふれあいを通して多くのことを学べる場にもなっています。今後も、ぜひとも継続していただきたいし、こちらもできる限り協力させていただきたいと思います。なんといっても、子どもたちのために献身的に活動して下さるスタッフのみなさんには感謝したいですね」(杉並第一小学校長 高田英雄先生)

ところで、すぎっ子クラブの活動を支えるスタッフたちは、ボランティアでありながらも、これだけ熱心に活動を続けている理由は一体どこにあるのでしょうか?

「子育てが一段落して時間の余裕ができたこともあります。何よりも子どもが好きということが大きいですね。どの子どももかわいいし、なついて膝の上に座ってくれたりすると、それだけで疲れも吹き飛びます。それに、日々

たくさん子どもたちと接していると、教えられることも多いんです」（池田さん）

また、春から保育士として働くことが決まったため、昨年末に惜しまれつつもスタッフを引退した下田さんは、

「すぎっ子くらぶが始まった時から、多くのことを勉強させてもらいました。子どもが大好きなので、大変だと思ったことはなかったけれど、みんながだんだん私に慣れてくれたことは嬉しかったですね。そのせいか、いろんなあだ名で呼ばれるようになって、中には『えっ』と思うものもありましたが、みんなが親しみを感じてくれた証拠じゃないかと思っています」

さらに、スタッフのリーダーの伴野さんは、「スタッフの皆さんからいただいた年賀状に、『子どもたちと触れあえる機会をありがとう』『今年も一緒に走り回るのが楽しみです』などとありました。個人的にも、この年齢で『すぎっ子さん』という97名もの新たな友人ができたことは、本当にうれしいですね。時には悩み事を相談されることもあって、それだけ信頼されているんだと思うと、始めてよかったなと感じます」

### ● 自らの「子育て体験」が ● 活動のペース

さらに伴野さんによると、自らの子育て体験が現在の活動の核になっているそうです。「うちの長男は、私立の小学校を受験するため、私立の幼稚園に通っている頃から、受験対策の塾だけでなく、英語・ピアノ・水泳教室にも通わせていました。私が車で送り迎えをして、車の中で着替えをさせたり、お菓子を食べさせたりする生活を続けていました。

ところが受験に失敗したため、長男は第一小学校に通うことになりました。最初は、それまでの世界とのギャップが大きく、正直戸惑うことも多かった。でも、PTAの仕事をするうちに、子どもの成長のためには、泥んこになって友だちと遊ぶ経験や、いろいろなお子さんと一緒に生活する経験が必要だと気

づきました。そのためにも、子育てに協力して下さる地域の力が欠かせないことがわかってきました」

伴野さんは、PTA時代に受けた研修が忘れられないといいます。それは自分が嫌いな人の名前と、その理由を書くものでした。

「記入後、ある人が『自分には嫌いな人がいなくて幸せだと思いました』と感想を話しました。すると講師の先生が『あなたは、もしかするとぬるま湯につかって、自分の殻にこもっているのでは？』とおっしゃいました」（伴野さん）

さらにその先生は、「みなさんのお子さんたちは決められた学校に通って、先生も友だちも選べない。たとえ嫌いな人がいても、努力しながら克服して、それで成長しているんです。一方みなさんは、嫌いな人を避けながらも十分生きていける。でも、それでいいのでしょうか？」と続けたそうです。

「子どもの居場所を作る活動に協力してほしいという話をいただいた時、正直、不安も大きかった。それでも一歩前に踏み出す決心ができたのは、この時の言葉が頭の中に残っていたからかもしれません。たしかに、気心のしれた仲間と一緒にいれば楽しいし、苦勞もない。でも、それでは自分の成長もないという気持ちがあるような気がします」（伴野さん）

伴野さんは、忙しい時間を割いて長時間インタビューに協力して下さいました。「いろんな思いがあるので、つい話が長くなってしまふんです」と笑う伴野さんは、「子どもたちのために、できる限りのことをしたい」という情熱であふれていました。このパワーに、また、一緒に活動するスタッフたちの情熱にも支えられて、すぎっ子くらぶは多くの成果を生み出してきたのでしょう。

文部科学省の「子どもの居場所づくり 地域子ども教室推進事業」は平成18年度で終了することが決まっています。その後もこの活動を継続できるよう、何らかの形で予算が確保されることを強く期待したいと思います。